「籠」の訓みについて

吉永　登

一

万葉集は周知のように、雄略天皇の次の歌で始まっている。

（雄略）天皇御製歌

籠もよ　み籠持ち　ふ串もよ　みふ串持ち　この丘に　菜摘ます児　家吉閑（告閑）　名告らさね　そらみつ　大和の国は　おしなべて　吾こそ居れ　しきなべて　吾こそませ　我こそは　告らめ　家をも名をも（巻一、一）

ところでこの歌は、いわゆる定型歌でないこともあって、訓だけに限っていっても、いくつかの問題がないでもない。しかしそのばあいでも初め二句に見える二つの「籠」を「こ」と訓むことについては、今日では誰一人として疑う者はないのである。したがってそれを改めてとやかくいうとなると、相当勇気がいることはいうまでもない。

二

実をいうと、「籠」の訓みにも、今日の「こ」に落付くまでには多少の変遷があったことは事実である。次にそのあとをあらまし辿ることにする。

まず平安朝であるが、その頃は意味も十分につかめていたとは思えない。唯一の訓を伝える元暦校本万葉集すら書写当時のものでないらしく、朱の片仮名傍訓と、朱を後に墨でなぞった片仮名二行書きの訓とがある。はじめの二句についていえば、前者は「籠毛與美籠母乳」（「美」を消すしるしあり）となっており、後者は「コモヨコモチヌ」となっている。最初の「籠」を共に「こ」と訓んでいるところは今日につながるものがあるといえようか。

次いで鎌倉時代になっても、その初期は大した進展を見ないが、仙覚本の一本である西本願寺本万葉集に至って、はじめて今日の「コモヨミコモチ」の訓が見られたのであった。もちろんこの訓といえども今日まで波瀾がなかったわけではない。

江戸時代に入ると、契沖の万葉代匠記の精撰本は、二つの「籠」を「かたみ」と訓み、荷田春満の万葉集僻案抄・賀茂真淵の万葉考は、共に「かたま」と訓んでいる。後者は加藤千蔭の万葉集略解が踏襲した故もあって、その流布とともに、一時は随分普及したもののようである。

ところでこの「かたま」の訓みに止めを刺したのは、江戸時代末期になった鹿持雅澄の万葉集古義であった。すなわち古義は

籠は十四ノ巻に、伎波都久乃乎加能久君美良和礼都売籽故爾毛民多奈布勢奈等都麻佐祢（籠にも無し湯夫名共摘さねなり）とも作み、和名抄に、広韻ニ云、籠ハ竹籠也、和名古と見えて…

…

といって、西本願寺本以来の「こ」の訓みにかえしたのであった。古義では蝕れていないが、万葉集には「籠」を「こ」の訓仮名として用いた例があって

打麻を麻続王海人なれや伊良籠の島の玉藻刈ります（巻一、二三）

犬上の鳥籠の山なるいさや川いさとを聞こせ我が名洩らすな

（巻十一、二七一〇）

などに見られるものがそれである。

「籠」字本来の意味で「こ」といわれた例があり、またその「籠」が訓仮名の「こ」として用いられた例があるとすれば、「籠」を「こ」と訓むことが不動なものになることは当然といえよう。今日この訓みが定訓となっているゆえんもそこにある。

三

ここで少し鉾先を転じて、周知の当時の歌ことばと話しことばとの分離の様子について考えることにする。もちろん歌ことばと話しことばといっても、後世のように顕著に見られるわけではない。しかしわずかにしても、すでに発生していたことも事実である。

その一つは、「かはづ」と「かへる」との関係であろう。すなわち万葉集では二〇例中、一九例までが

今日もかも明日香の川の夕さらず川津鳴く瀬の清けかるらむ

（巻三、三五六）

草枕旅にもの思ひわが田けば夕かたまけて鳴く川津かも

（巻十、二一六三）

などのように、河鹿をも含めて蛙のことを、「かはづ」と仮名書にしている。残る一例だけは

朝宿鹿火屋が下に鳴く蝦声だに聞かば我恋ひめやも（巻十、二二六五）

となっていて、「蝦」字をどう訓むかに問題がないわけでない。しかしこのばあいも、「かはづ」と訓むべきことは、題詞に「寄蝦」とあることで知られよう。というのはやはり「詠蝦」という題詞を持つ歌の本文が、五首共に

三吉野の岩もと去らず鳴く川津うべも鳴きけり川を清けみ

（巻十、二一六一）

などと仮名書の「かはづ」となっているからである。もちろん諸注も悉く「かはづ」と訓んでいて例外がない。

ところで他方話しことばとして別に「かへる」ということばのあったことは

我が屋戸の黄変つ蝦手見るごとに妹をかけつつ恋ひぬ日はなし

（巻八、一六二三）

児持山若加敞流豆のもみつまで寝もと我は思ふ汝はあどか思ふ

（巻十四、二四九四）

などの歌にも見られるように、かえでもみじのことを「かへる」の「手」の形をした葉を持った木という意味で「かへる手」といっていることでも明らかであろう。

また「たづ」と「つる」との関係にも同じことがいえるのではなかろうか。すなわち鶴のことは仮名書では、何れも

大和恋ひいの寝らえぬに心なくこの渚崎みに多津鳴くべしや

（巻一、七一）

和歌の浦に汐満ち来れば潟を無み芦辺を指して田鶴鳴き渡る

（巻六、九一九）

のように「たづ」と訓むべきものばかりである。もちろん「つる」と仮名書になった例はない。他方「鶴」と書いたものは一八例ばかりあるが、今日と同じく「つる」と訓んだと疑うこともできよう。しかしそれも

草香江の入江にあさる芦鶴のあなたづたづし友無しにして

（巻四、五七五）

天雲に羽うちつけて飛ぶ鶴のたづたづしかも君しまさねば

（巻十一、二四九〇）

を見れば明らかなように、「鶴の」「たづたづし」と、同音繰返しの技巧を用いているのであるから「たづ」と訓むべきで、他も推して知ることができよう。

それでは「つる」ということばがなかったかというとそうでもない。たとえば

山の辺の御井を見がてり神風の伊勢少女ども相見鶴かも

（巻一、八一）

妹も我も一つなれかも三河なる二見の道ゆ別れかね鶴

（巻三、二七六）

などに見られる「鶴」は、助動詞「つ」の連体形「つる」の訓仮名として用いられていて、「たづ」と訓む余地はないのである。「つる」ということばが存在したことは確認できるが、歌では用いない。やはり話しことばと解するより外はない。

ところでこのように歌ことばと話しことばが分離しているものは、万葉時代にはあまりないのであるが、共通していえることは、歌ことばが古く、話しことばが新しいということであろう。これはまた後の文語と口語との関係に同じといえようか。

四

日本書紀の神代の巻の下に、海幸彦と山幸彦との兄弟が争った話が見えている。その一節に山幸彦が兄から借りた釣針を魚に取られて途方にくれていると、そこへあらわれた塩土の翁が「無間籠」を作って、それに山幸彦を乗せて海神のもとに届けるという下りがある。この「無間籠」は一書では「無間堅間」となっていて「籠」を「かたま」といったことは動くべくもない。

ところでここで今一つ注目しなければならないことは、書紀の一書では、この「堅間」に注して

所謂堅間は是れ今の竹の籠なり。

といっていることである。この注に見える「籠」は、初めに「堅間は」とあるので「かたま」と訓む余地もなく、やはり諸本にしたがって「こ」と訓むより外はない。もとよりここにいう「今」は、いつをいうかは明らかでないが、書紀の編纂せられた和銅年間を著しく遡ることはないように思われる。いずれにしても「かたま」は古語であり、「こ」は新しいことばであるということは動くべくもない。

五

さて前節において、「籠」には古語としての「かたま」と、新しいことばとしての「こ」との二つがあったことを明らかにした。しかもその時代はほぼ万葉集と同じ頃のようである。とすれば万葉集のばあい、古語の「かたま」を歌ことばとし、新しいことばの「こ」を話しことばとして用いたとは考えられないであろうか。

こうした考えは必ずしも突飛とは思われない。まず鉄壁と思われ

た「籠」のばあいにも唯一の仮名書の例である「故にも満たなふ」（巻十四、三四四四）が東歌であるということである。方言をまじえることの多い東歌とすれば、そこにしか用いられていないことばを、そのまま中央語として取上げることは危険という外はない。かくて「籠」についていえば、前引「伊良籠の島」や「鳥籠の山」に見られる訓仮名「こ」だけが論議の対象として取上げられることになるのである。すなわち「こ」は前引「蝦手」や「相見鵠かも」の「かへる」や「つる」と同じく話しことばであり、「かはづ」や「たづ」に対応する歌ことばが別にあったと考えられないでもない。そのことばこそ東歌にしか見られぬ「故」ではなく、書紀が「こ」の古語だという「かたま」と考えられないであろうか。

それでは万葉集では「かたま」ということばが用いられているかというと、残念ながら見当らない。これがまた一度は用いられた「かたま」の訓みの拾てられたゆえんでもあろう。しかし万葉集では仮名書を持たないことばは少くない。二、三を挙げると「価」・「皈」・「行幸」・「歩」・祝（部）」などがそれである。それに「かたま」のばあいは、「かつま」の形でならば

玉勝間逢はむといふは誰なるか逢へる時さへ面隠しする

（巻十二、二九一六）

などがある。

六

定訓となっている「こ」にしたがって、全体を

こもよ　みこもち　ふくしもよ　みふくしもち　このをか
に　なつますこ　いへきかな　なのらさね　そらみつ　や
まとのくには　おしなべて　われこそをれ　しきなべて
われこそませ　われこそは　のらめ　いへをもなをも
3・4　5・6　5・5　5・5　4・7　5・6　5・6
5・3・7

と異状な出だしで訓むのがよいのか、春満・真渕が訓んだ「かたま」を生かして

5・6　5・6　5・5　5・5……

とすなおに訓むのがよいかはむずかしい問題である。ともかくこの際、少くとも先入主を拾てて、じっくり考える必要のあることだけは否めない。